

オオムギの「赤かび病」と「赤かび病類似症」

1. オオムギ赤かび病

主に、穂に発生します。初め穂の一部または全体が褐色になり、穎の合わせ目から桃色のカビが発生します。小穂単位で発生する傾向があり、六条大麦は3粒横並びで褐変しているところが見られます（左図）。変色が縦の「列」でなく横の「段」で見られれば、赤かび病の可能性が高くなります。この「段」での発生がわかりやすいので、コムギの発生例を載せておきます（中図）。桃色のカビを顕微鏡で観察するとフザリウム菌の胞子が見られます（右図）。

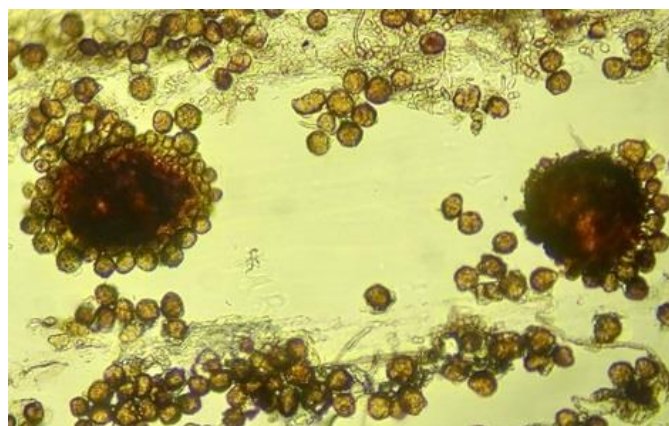


2. オオムギ赤かび病類似症

エピコッカム菌によるものと、スポロボロマイセス菌によるものがあり、いずれも栽培後期に発生します。

2-①エピコッカム菌によるもの

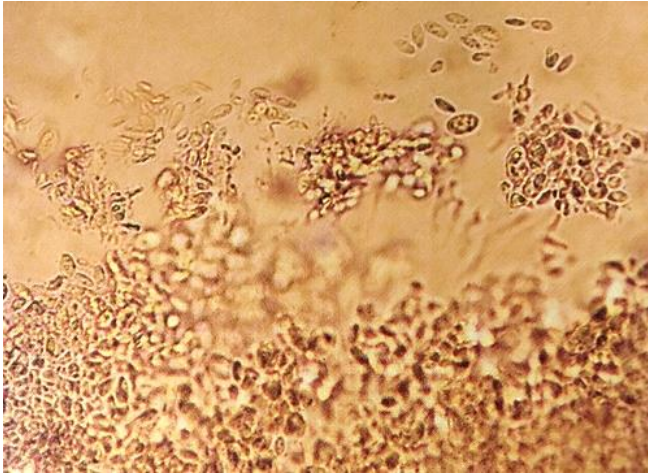
穀粒の基部から鮮紅色に着色し、多発すると穂を含む株全体が赤黒く汚れたように変色します（左図）。変色部には暗褐色球形で表面にイボのある胞子が密生しています（右図）。



2-②スポロボロマイセス菌によるもの

本菌は、いわゆる赤色酵母です。発生初期には、穎の合わせ目を中心に鮭肉色～暗赤色のカサブタ状の塊が付着します。肉眼では赤かび病との識別は困難ですが、カサブタ状の塊を検鏡すると、フザリウム菌の胞子ではなく、赤色酵母の塊であることが分かります（上左図）。

この酵母は、出芽増殖の際に「射出胞子」といって胞子を飛ばすので、次々と周囲に拡がり、多発すると酵母細胞の付着は穂～葉鞘、さらに株全体におよび、圃場全体が淡紅色に染まります（上右図）。健全圃場（下左図）と比較すると変色がよく分かります。激発圃場では穂首の折損被害が多く見られました（下右図）。



赤かび病類似症の発生生態は不明ですが、上記の穂首折損のように、いわゆる「枯れ熟れ」状態に付随することもあります。

発生後の対処療法はないので、排水対策により根の健全生育をはかるとともに、土作りにより地力を高め、地力に応じた適切な肥培管理を行って、後期凋落を避けるようにしてください。